

## (七) モーツァルトの秘密

もし作曲家モーツァルトが生きていたならば、彼は今年（二〇〇六年）二百五十歳になる。人気随一のその音楽と興味尽きない人間性を慕って、今年是世界中で誕生記念のコンサートや催しがあふれている。筆者の母行（日本銀行）勤務時代には、本店十階の食堂のバックグラウンド音楽としてあの美しい歌うようなメロディー（ピアノ協奏曲二十一番の緩徐楽章）が時々流れていたことを思い出す。

最近では、モーツァルトの音楽は人の心を癒す効果があると喧伝され、その効果は動物や植物に対してさえ認められるという新説（珍説）も真面目に語られている。今年五月の連休には、東京丸の内周辺でモーツァルトの曲ばかりを取り上げた二百を超える公演の集中的コンサートが四日間催された。そのタイトル「熱狂の日」音楽祭そのもので

あった。筆者もその幾つかの公演を聴きに行った。また、かつて母行内の文芸誌に長編のモーツァルト論を書かせていただいたことがある（平成二年「行友」五十二号）。いったい、人気抜群のモーツァルトの音楽には何が隠されているのだろうか。

### モーツァルトの音楽、四つの魅力

その特色と魅力は、第一に、均整美と明快さにあると思う。マーラーやワーグナーの重厚長大型の音楽よりも圧倒的に人気が高いのは、引き締まった筋肉質的な美しさが現代にマッチしているからだろう。第二に、その音楽のジャンルの多様性が挙げられる。ピアノ曲、交響曲、協奏曲、オペラなど彼が名曲を残さなかつた分野はないといってよい。第三に、一つの曲の中で明暗（とくに長調と短調）を対象させる形をとった美の追及がみられる点だ。そして第四に、比較的地味な存在である木管楽器に対して暖かいまなざしを向けており、その音色の美しさを引きだしている点が魅力的である。

ひと言でいえば、その音楽は天才でしか書けない素晴らしいメロディーにあふれているからだ。これらの点は従来から多くの人によって指摘されてきたことだが、筆者は最

近、むしろ次の二点に深い秘密があるのではないかと考えている。

### 純粹さ、ないし抽象性

第一に、モーツァルトの音楽は音楽として例をみないほど純粹であり、抽象性が極めて高いことだ。歌曲やオペラを別とすれば、器楽曲を中心として彼の音楽の大半は、場所、季節、風景、人物など具体的なことを示唆するものはほとんどなく、すべて抽象的な音の美しさを極めたものである。

この点は、その他多くの作曲家によって書かれた名曲とはかなり異なる。例えばビバルディの合奏曲「四季」、ベートーベンの交響曲「田園」、メンデルスゾーンの交響曲「イタリア」、あるいはチャイコフスキーの管弦楽曲「一八一二年」などは具体性が強い表題音楽であり、誰にでも分かりやすくまた親しみやすい。これらの音楽は時間や場所について具象的である。一方、モーツァルトの音楽は概してこのような具象性をもたず、音の芸術としての抽象性や普遍性がきわめて高い。それが大きな特徴であり、そのために地域、文化、思想、歴史を超えて世界中で愛されているのだと思う。

こうした抽象性あるいは純粹さは普遍性につながる。そのための条件の一つは単純性だろう。普遍性を持つには、単純でなければならぬ。そして単純性を極めたものは美しい。これは何も音楽に限らない。例えば、数学において驚異的とされるオイラーの公式、

$$e^{i\pi} + 1 = 0$$

はその好例だろう。なぜなら、この式は、いくつかの基本的な値、すなわち自然対数の底 ( $e$ )、虚数単位 ( $i$ )、円周率 ( $\pi$ )、数の基本単位 ( $1$  および  $0$ ) を一つの方程式としてまとめているからだ。そればかりか、足し算 ( $+$ )、掛け算 ( $i\pi$ )、累乗 ( $e^{i\pi}$ ) をそれぞれ一回ずつ登場させるという奇跡的な式にもなっている。

いま一つの例として、経済理論における完全競争のモデルがある。そこでは、一定の条件のもとで均衡が存在しそれは安定性と最適性を満たす、という命題が導かれる。その理論も美しさの例だろう。モーツァルトの音楽にせよ、オイラーの公式にせよ、完全競争均衡の命題にせよ、共通点がある。第一に、それらは直接現実に役立つものではないことだ。第二に、高度に抽象的かつ単純化されたものであることだ。そして第三に、したがって世界のどの人にとっても文化を超越した美しいものとなっていることである。

形式制約が生みだす美しさ

モーツァルト音楽の秘密の第二は、音楽の形式からみればたいてい所定の形式の中に収まっており、その中に天才的な類例のない美しいメロディーを盛り込んでいることだ。ソナタであれ交響曲であれ、その形式を所与と考える（形式工夫の必要性に煩わされない）一方、その中においてメロディーだけで勝負をした、ともいえる。

常識的に考えれば、形式、メロディーの両方を自由にすれば、より良い作品ができると思われるかもしれない。ブルックナーの交響曲には演奏時間が何と百分もかかるものがあり、しかも作曲家本人や他の作曲家あるいは指揮者がその楽譜を種々改訂を加えたものが演奏される。しかし、音楽だけでなく何ごとにつけ全面自由にすればベストの結果が得られる、というのは真実でないように筆者には思われる。むしろ、予め一定の制約が存在し（無いときには人為的にそれを設定し）その枠組みの中で最善のものを作る、という場合の方がかえって良い結果を生む場合が少なくないのではないか。

例えば、俳句では五七五の十七音だけしか使用できない。

くたびれて 宿借るころや 藤の花 (芭蕉)

制約があるからこそ、このように密度の濃い印象深い表現が可能になる。また、ある国の国際戦略においては、コミットメント（将来における特定の行動をみずから確約すること）をすれば、逆説的ではあるが、コミットする主体にとってかえって良い結果をもたらす場合が多いことが理論的に知られている（昨年ノーベル経済学賞を受賞したシエリングが証明している）。

さらにいえば、中央銀行がその基本目標である物価安定を達成する場合、目標インフレ率を公表し、あえて自らを束縛する「インフレ率ターゲットイング」という手法を採れば本来の目標をより良く達成できることが経験的にも知られている（ただし、金利水準がゼロの日本の現状では政策運営手段が大きな制約を受けているのでこの手法は現時点では妥当しない）。

これらの例は、いずれも形式によって縛りをつける（つまり自由度を一つ減らす）ことによつて、より大切なことに集中できることを示唆している。結局モーツァルトの音楽も、所定の形式を守ること（形式的工夫のために腐心する必要がなかったこと）から比類ない美しいメロディーとなり得た面があるのではなからうか。

## 定年退職後に楽しみを温存

モーツァルトの全楽曲のうちどれがベストか。これは難問であり個人差が大きいが、現在の筆者の好みは、澄み切った気高い音で表現される奇跡的な作品であるクラリネット協奏曲（K六二二）、晩秋の青空のような透明感が支配するピアノ協奏曲二十七番（K五九五）、そして情感と色彩感にあふれるバイオリン・ソナタ変ロ長調（K三七八）である。去る一九九一年には、没後二百年を記念して膨大なモーツァルト全集が出版された。この全集は、演奏時間がわずか十一秒の小曲から二時間を超えるオペラまでモーツァルトのあらゆる音楽作品を合計七百二十曲、コンパクトディスク百七十八枚にわたって収録し、それに解説書十五巻を付した画期的なものである。筆者は給料のひと月分近い大枚を投じて刊行当時にこれを購入した。その一部は何度も聴いたが、仮に全曲を通して聴くとすれば、毎週末の二時間を充てても聴き終えるには一年八か月もかかる計算だ。その楽しみは、いまの仕事而定年退職したあとの楽しみとして取り置いてある。

（日本銀行旧友会会報「日の友」三九四号、二〇〇六年七月）